

世界の バスケットリー × バスケットリーの 世界

鶇の運搬籠

卯田宗平 民博人類文明誌研究部

わたしたちの生活になくはならない籠。安くて便利な素材の籠がありふれるなかで、中国や日本で見られる鶇飼の現場では、今も竹製の籠が愛用されている。その理由をひもとくと、現代の大量消費社会とは異なるもうひとつの姿が浮かび上がってくる。

わたしたちにとって籠は身近な存在である。スーパーに入ると手にとる籠、状態を問わずになんでも受け入れてくれる洗濯籠、「はやく魚を入れてくれ」と言いそうなわたしの魚籠。

わたしたちの祖先は狩猟採集の時代に生活の必要性から籠を作った。そして現在、わたしたちは籠なき世界を想像できないほどさまざまな籠を使用している。汎用性が高くて丈夫な籠を安価で入手できるようにもなった。こうした時代においても、特異な用途のみ利用される籠がある。鶇の運搬籠もそのひとつである。この籠は、鶇飼の鶇（カワウやウミウ）をもち運ぶために使用される。

カワウの運搬籠

鶇飼は肉食性の鳥類を利用して魚を捕る漁法である。現在、鶇飼は中国と日本で見ることができ、中国の鶇飼では漁師たちが自宅で繁殖させたカワウが利用される。漁師のなかには自ら育てたカワ



家の軒先で運搬籠を手際よく編む古老（山東省済寧市、2007年）

ほかに代替できる籠が村の商店に売っていないからである。くわえて、村には籠作りの技術をもつ古老が多くおり、丈夫で安価な籠を容易に入手できるからだ。

ウミウの運搬籠

日本では、現在、長良川や木曾川、筑後川など一〇カ所以上で鶇飼が続けられている。日本各地の鶇飼では、茨城県日立市十王町で捕獲されたウミウが利用されている。各地の鶇匠たちは十王町から送られてきたウミウを自宅などで飼いに慣らしている。このとき十王町からウミウを運ぶのに運搬籠が使用される。

運搬籠は、十王町の鶇捕り師たちが捕獲作業のあいまに作るものである。籠はマダケを利用し、

ウをほかの漁師に販売するものもある。カワウを繁殖させる漁師は中国沿岸部の山東省や江蘇省に多いが、彼らは内陸部の湖南省や江西省、四川省までカワウを売り歩く。このとき運搬籠が使用される。

運搬籠は漁師自身が編んだものもあれば、村の古老から購入したものもある。カワウの繁殖作業がおこなわれる三月から五月に村々を歩くと、家の軒先で運搬籠を手際よく編む古老の姿をよく見られる。運搬籠はマダケやモウソウチクで作られ、なかには稲わらが敷き詰めてある。稲わらを敷くのは、なかにいるカワウの腹にタケのささくれが刺さらないようにするためである。カワウを売り歩く漁師は、ひとつの籠に二五日齢前後で巣立ち前の幼鳥を一〇羽ほど入れ、それをふたつ担いで各地をまわる。

彼らが今でも竹製の籠を使い続けるのには理由がある。それは、プラスチック製のものも含め、

六つ目編みで仕上げたものである。籠作りでは、まず長さ一八〇センチメートルほどのヒゴを準備し、籠の底部を六つ目に編み込む。そのあと、籠の腰部を立ちあげ、胴部の周囲に別のヒゴをまわして編む。最後に、菰を胴部に巻いて完成させる。ひとつの籠を作るのに計五〇本のヒゴのほか、菰やわら縄、ロープが使用される。実際に籠を利用するときは、下半分にビニール袋を巻きつける。これは、運搬時にウミウの糞尿が籠から流れ出るのを防ぐためである。

この籠は片道の運搬でしか使用されない。それでも彼らは、タケの切りだしやヒゴ作りも含め、時間と手間をかけながら運搬籠を作る。竹製の籠を作り続ける理由はさまざまあるが、ウミウの購入者である鶇匠が運搬籠を再利用できることも重



上：完成した運搬籠（茨城県日立市、2018年）
下：鶇小屋におかれている、ウミウを飼育するための籠（岐阜県岐阜市、2012年）



カワウをもち運ぶときに使用される円錐（えんすい）台のかたちをした籠（山東省済寧市、2007年）